

公開シンポジウム デジタル社会における多様性が尊重された学び ——ICT×DE&I の可能性——

開催日

2025 年 3 月 23 日（日）14:00-16:00

開催場所

京都大学吉田キャンパス 総合研究 8 号館 講義室 2

参加人数

小中高等学校教員、教育委員会関係者、大学教員・院生等 32 名

後援

国立研究開発法人科学技術振興機構

実施の様子

京都大学大学院教育学研究科 教育実践コラボレーション・センター E.FORUM は、2025 年 3 月 23 日（日）に、京都大学吉田キャンパス 総合研究 8 号館 講義室 2 において、公開シンポジウム「デジタル社会における多様性が尊重された学び——ICT×DE&I の可能性」を開催しました。総勢 32 名の教職員、教育委員会関係者、大学教員・院生等が参加してくださいました。

本シンポジウムでは、デジタル技術の進展が社会における多様性をいかに支えうるのか、そのうえで、ICT が様々な教育の場面でどのような役割を果たしうるのかを検討することを目的に、探究的な学びを支えるデータサイエンス教材の開発事例や、多言語・多文化な環境にある米国ハワイ州における探究学習と ICT 活用の事例など、ICT と DE&I のかけ算によって生まれた先進的な実践が共有されました。

これらの事例を手がかりに、Society 5.0 時代においてデジタル技術が多様性をどのように支え、学びを革新していくのかについて、SIP プロジェクトのメンバーより報告が行われました。

はじめに、SIP サブ課題 A の研究開発責任者である京都大学大学院教育学研究科の松下佳代教授より、SIP の概要説明がありました。続いて、同研究科の石井英真准教授より、本公開シンポジウムの趣旨について説明がありました。

その後、京都大学大学院教育学研究科博士後期課程の岡村亮佑さんと田野茜さんより、



岡村亮佑さん（左）・田野茜さん（右）

「米国ハワイ州における探究的な学習の諸相——ICT・DE&I・『場所に根ざした教育』の観点から」と題して発表がありました。発表では、教育者バフィー・クッシュマン・パッツの教育理念に基づいて設立された SEEQS 校におけるプロジェクト学習・探究学習の実践が紹介され、サステナビリティを主題とした取り組みが報告されました。あわせて、2001 年に認可を受けたチャータースクールである University Laboratory School の事例に加え、1918 年にソフィー&ジョージ・クック夫妻によって創立された Hanalei School の事例についても紹介がありました。



久富望助教（左）・木村裕教授（右）

続いて、京都大学大学院教育学研究科の久富望助教と、同博士後期課程の桑川薫樹さんより、「デジタル社会における多様性の眼差し」と題して発表がありました。本発表では、義務教育段階におけるデータサイエンス教育の可能性と課題に焦点を当てながら、データ活用に伴う倫理的・法的・社会的課題（ELSI）の視点、及び「多様性をいかに捉え・支えるか」という観点から、教育実践のあり方が問われました。特に、ICT を活用したデジタル・ポートフォリオの試みや、小・

中学生向けのデータサイエンス教材の開発事例を踏まえながら、データサイエンスにおけるステップを3つに整理し、その中で生まれる主観や価値判断の多様性をどのように教育に取り込むかについて論じました。また、「模擬倫理審査教材」の開発を通じて、生徒自身がデータ収集や活用の際に倫理的視点を持つ重要性を学ぶ取り組みも紹介し、教育現場におけるデータリテラシーと倫理観の涵養を強調しました。

さらに、これらの報告を受けて、指定討論者である花園大学文学部の木村裕教授が論点を整理しました。まず、シンポジウム全体のテーマである「デジタル社会における多様性が尊重された学び」に関して、「何のために」「どのような多様性を」「どのように」尊重するのかという根本的な問いを提示し、これらの捉え方によって実践の方向性に違いが生じる可能性を指摘しました。

また、ハワイにおける実践事例については、コミュニティ全体が学びの場に巻き込まれ、子どもだけでなく大人も変容していく可能性に注目し、そうした実践の社会的意義について論じました。さらに、データサイエンスを題材とした実践については、知識やスキルの習得にとどまらず、DE&I に関する知識や価値観などを育てる教育にもなっていることの意義や重要性も指摘しました。

木村教授は、データや ICT の活用が教育にもたらす可能性だけでなく、それを支える教員力量形成の必要性、教材の目的意識の明確化や共有、そして「共に創る場」としての学校のあり方に対する深い洞察を提示しました。討論では、参加者に対して実践の背後にある価値や構造を見つめ直すよう促し、今後の教育実践と研究の発展に向けて示唆を与えるものとなりました。

質疑応答では、参加者から鋭い問題提起や具体的な質問が寄せられ、本シンポジウムが実践



と理論の接点を深める貴重な場となりました。たとえば、「義務教育におけるデータサイエンスの基盤をどのように構築していくか」という問いに代表されるように、情報教育をめぐる現場の葛藤が共有されました。また、高校で探究活動に伴走する立場から「生徒がアンケートやデータを扱う際に感じていた危機感、違和感とまさに重なる」との声が紹介され、倫理審査教材の意義に対する共感の声も聞かれました。さら

に、「DE&I の推進のために、どのような要素をデジタル・ポートフォリオや教材に織り込むべきか」といった問いは、今後の実践開発や研究の方向性にも関わる重要な論点でした。これらのやりとりを通じて、デジタル社会における学びと多様性をめぐる問いが、実践者・研究者の双方に共有される契機となりました。

最後に、木村教授より発表内容を受けた総括的コメントが述べられました。木村教授は「授業づくりやカリキュラム開発とあわせて、学校そのものを包摂的な学びの場としていく視点が重要である」と強調するとともに、ICT の活用によって「これまでつながることが難しかった人々とつながりやすくなること」や「学び合うかたちがより多様になること」などの可能性についても指摘しました。

また、公開シンポジウム終了後に実施したアンケートには、本シンポジウムを通して得られた新たな視座に加え、学校現場での応用可能性に関する実践的なコメントも多数寄せられました。たとえば、「探究が教科の学びを超えて DE&I の実現にもつながる点に可能性を感じた」「デジタルシチズンシップについて考えさせる教材を構想したい」「多様性を重んじながらも、同化を求めがちな実情に向き合い、何が子どもたちに必要かを問い続けたい」といった声も聞かれました。

また、「IT 機器を活用して僻地複式校でも子ども集団のつながりを広げる可能性」など、現場の多様な文脈での応用も想定されていました。加えて、ICT を活用した教育の可能性に関しては、デジタル・ポートフォリオのストレージ拡張やデータ処理の効率化に関する提案が挙がるなど、教育と先端技術との接続に対する関心の高まりも見られました。

E.FORUM では、今後も実践に役立つ知見を得られる、楽しくて元気の出る研修を提供していきたいと考えております。今後ともご支援のほど、よろしくお願いいたします。

※登壇者の所属は、2025 年 3 月時点のものです。

文責：サチニ・ウダワッタ
京都大学大学院教育学研究科
博士後期課程

本シンポジウムは、内閣府による SIP（戦略的イノベーション創造プログラム）の課題「ポストコロナ時代の学び方・働き方を実現するプラットフォームの構築」（サブ課題A「新たな『学び』」のデザイン開発）における研究開発「真正で探究的な学びを実現する教育コンテンツと評価手法の開発」（研究開発責任者：松下佳代）の一環として行われました。